



七  
 子  
 孫  
 本  
 孫  
 忠  
 信  
 長  
 記  
 前篇  
 六

特別
13
2507
6



遠  
2507  
23-6

繪本拾遺信長記初篇卷之六

目録

上人自吊討死者事

澤女洗合致

上人自討死者乃若と吊ひ給へ

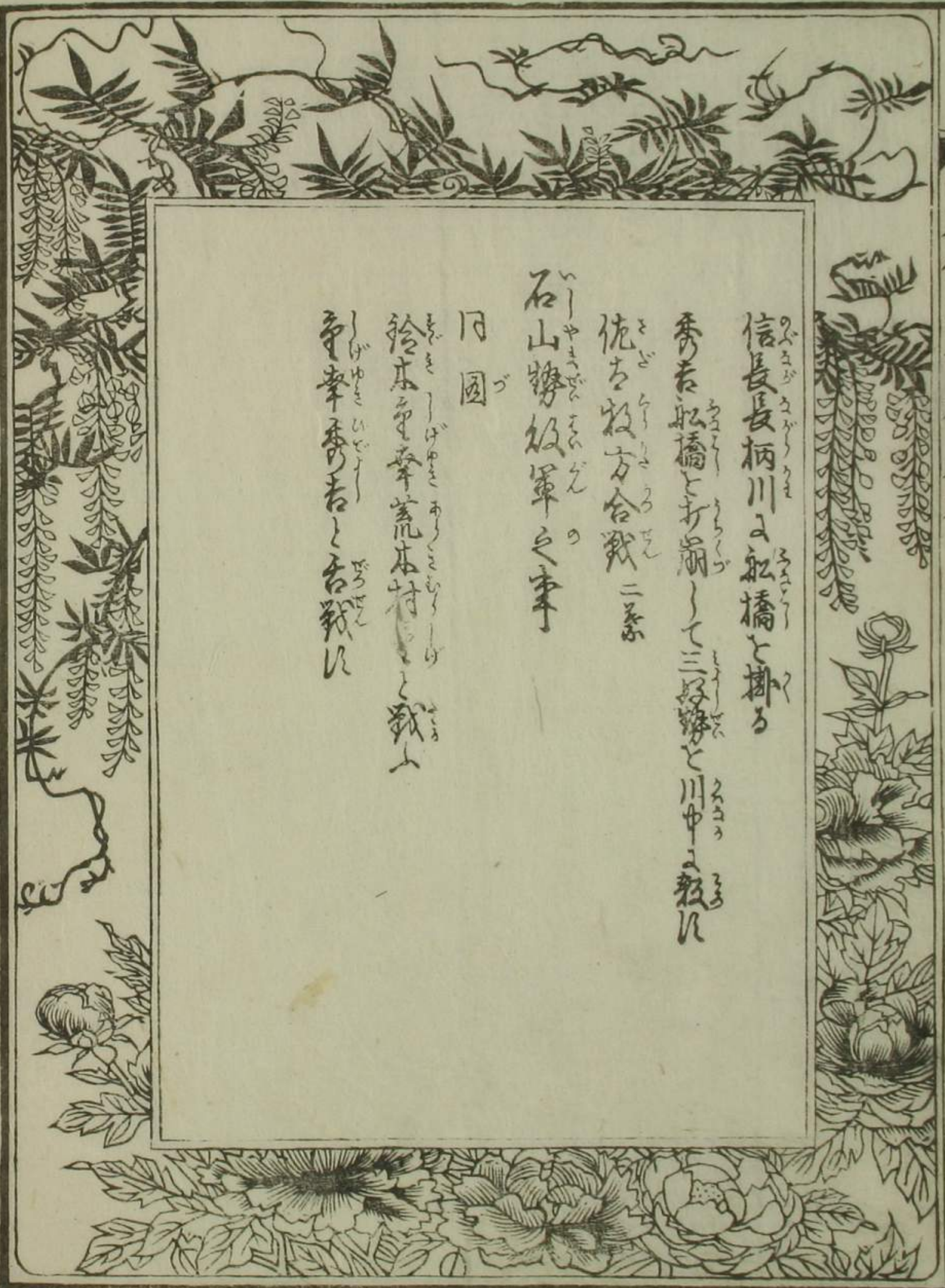
朝倉淡舟坂本出張之事

日國

秀吉退陣の計議とあり

信長御攝州退陣之事

信長御攝州退陣之事



信長長柄川に船橋と掛る

秀吉船橋と打崩して三好勢と川中へ殺入

佐方牧方合戦二条

石山勢敗軍之事

旧圖

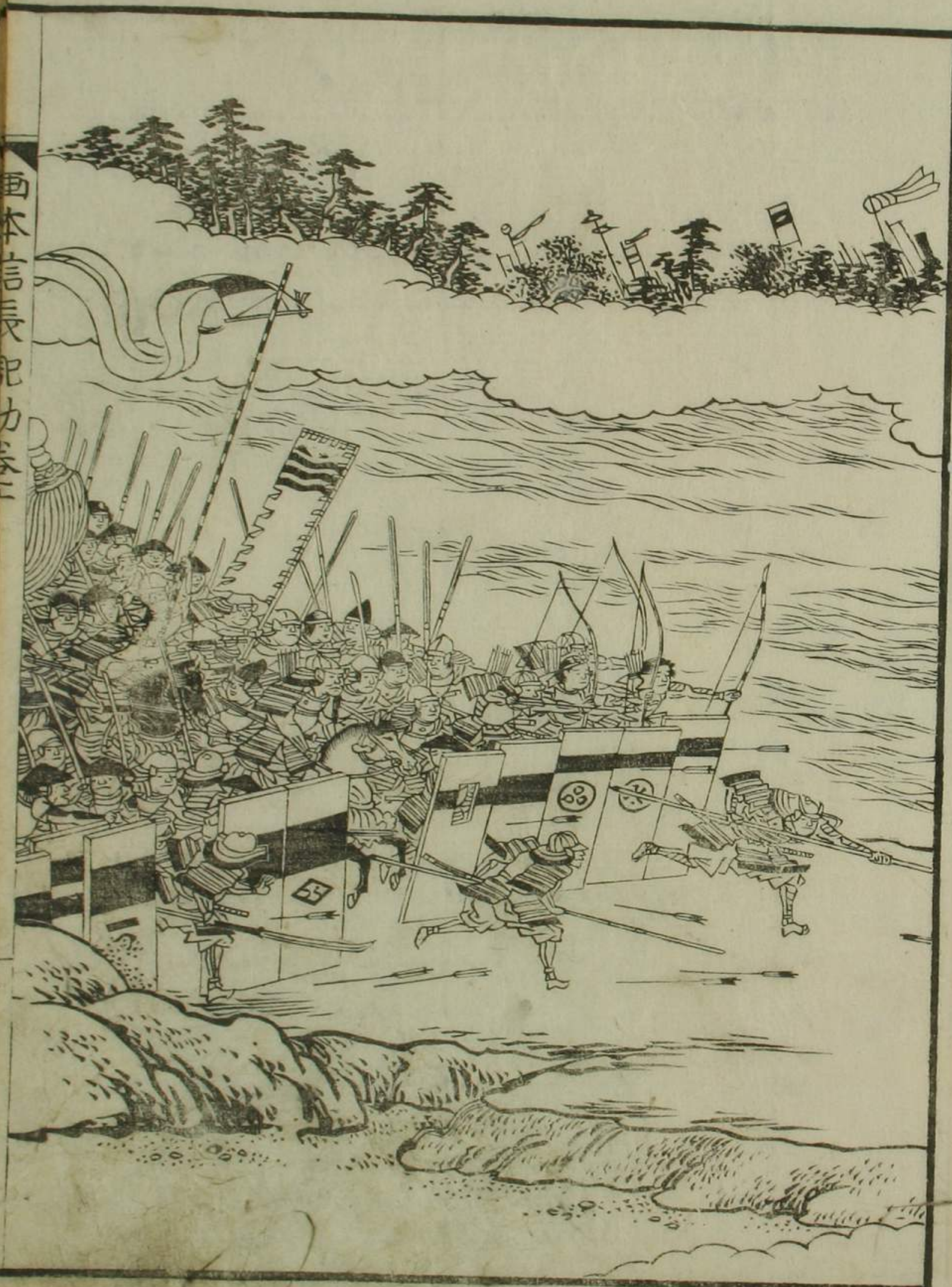
鈴本寺幸荒本村に戦入  
争幸秀吉と吉就に

繪本拾遺信長記初篇卷之六

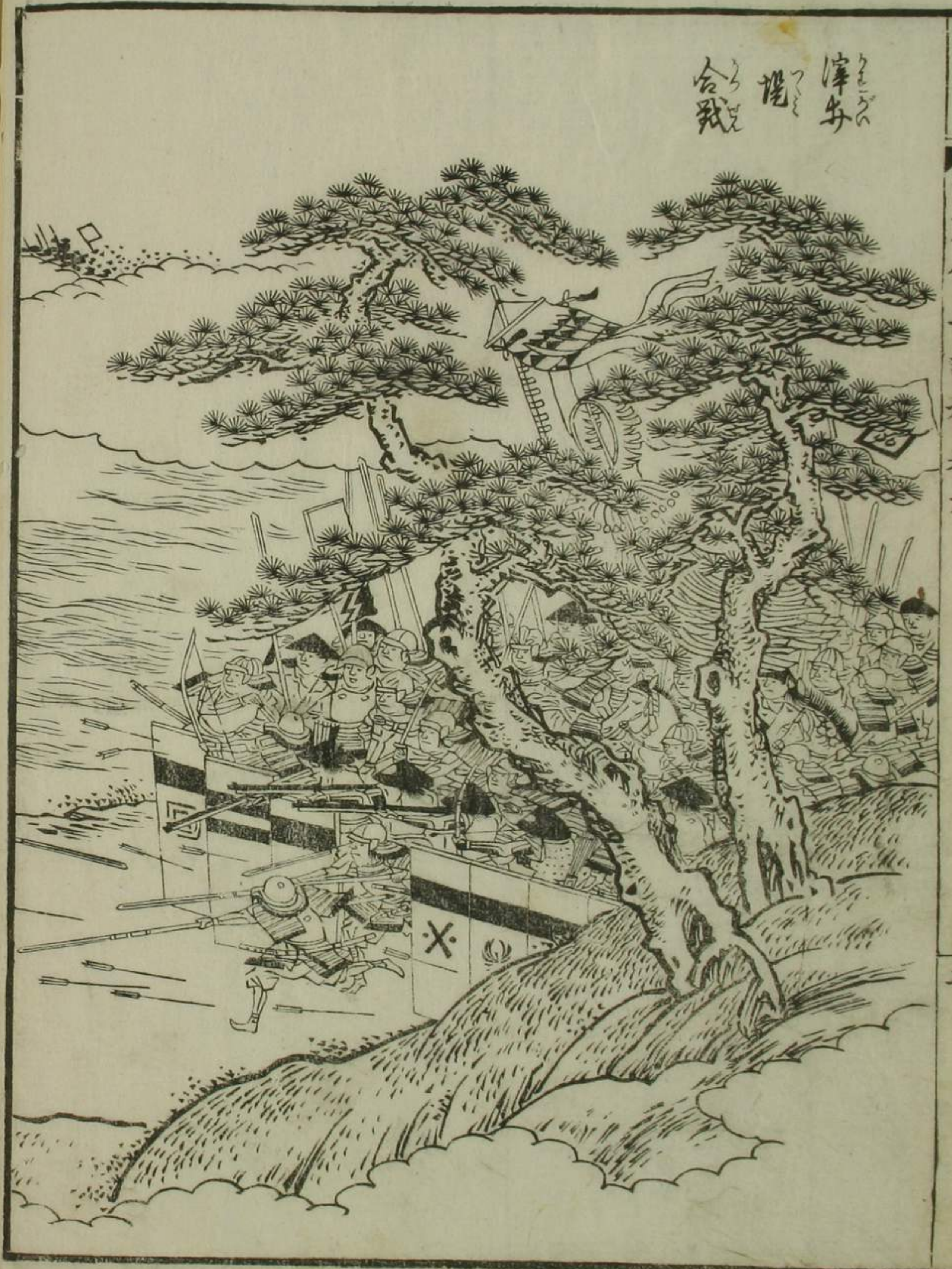
三人自吊討死者事

又信長乃下知として摩惠多政左衛門奉家八百余騎の道兵  
を率味方の軍と助人と搦にりんと来りたる小深にて合  
戦難儀の俤又久々これ何う志はじしに於豫べき其又字又  
川を渡し勝濟なる石山勢の志中一面より討てかり日  
の勇氣十倍すまよりまき切敷せば門後勢新子の勢切  
崩されに度治にあり引形を遊に抽し摩惠多が一軍其外  
佐々後安湯治が軍よりして追討をふる石山勢さんぐ  
あつ討ち者殺を知り伏し討ち殺すより鈴本寺幸が下





合我 澤舟



知して中岡出羽守又百金誘を引率し援の爲とく押来り互に  
新も入替て討尅と後し我よりけ討日も既又書てとに勝  
られりく双方陣と明し軍と押せお引よぞ引りけるは合戦  
小田方の討死六百余人石山勢二百余人討死より取如上人この  
るを定し百とつて歎き悲しむ死の死骸とを集めあさせ二  
の丸と外曲論の回又埋め上人自後生威佛の存とく漢神念佛  
て懇又吊ひ給ひしれがち申の門徒多きをあげて返出し叔と我  
いふ業因縁して今日の軍又討死のせざりしそや活如来の御門を  
の御吊ひと致り何若う威佛なとぞあえきや何る陣しの討死乃  
人くやけ後合戦と云復りく一書又討死し未未佛軍の樂と交人  
と我の歎ぶ者も有り或は威し返又歎く有りけしに終るも乃

大將士乘のまゝに交わり兵糧炊く暇もなかり死と懼る者二人  
白しじり英雄の信長も終に本願寺と切崩とす終るは只けり  
によろしくかくれどく本願寺勝又奈とく今も上人の一向歎味方乃  
も負討死を歎き給ひ奉幸を百とく終るの軍師諸葛子房が  
計略を妙ひ百度我ひ百度勝とも我本意にいつくは唯歎く  
信長じて本願へ退りしや両家合戦の止るをこそあしませけ  
とて隙を抄え入る宣ひたる小寺幸徳でや申の終のとく誰か國  
我を歎ひ私と歎む者いつんや我も信長三奴と討と名し  
て其実り富山と奏る小ありけ成又三奴の一書退去とりとも  
又い滅亡しうりとも信長軍勢と併せいよく本願寺と奏討  
り急るなりし是合戦の止るをうりたる勢方なりと人強て信長を退



上人自ら  
討死乃  
者と  
吊い  
後

之とありし其一つの計策あり祇前の朝倉義系いと人の親  
 族はして信長と代々の懇款あり江州浅井又子と又朝倉と一  
 味と信長と疎拙と如く今出山すし倭者を以て浅井朝倉乃  
 両家をわづらひ軍勢と敵とと居せしめ信長後の勇いと思  
 忽ち軍勢をまとめく本國(引込込)是もと他人と情て款と征  
 する計策あり上人ゆしめし大さ小脱ひ給ひ七里三河守撰  
 田と膳西人と倭者として口上こましく申せしめ朝倉が本國  
 (港)給ふ叔もけ附信長御中將の本陣と押はしと津守境  
 の級軍村誠中守が討死をせ給ふき想りへうしとくけ想と  
 晴とべきことまぐく恩惟るるがきつめとて申出て子馬と馳て  
 江州横山と在城せし本下居者とぞめされたり

朝倉浅井坂本出張之事

去後よ本親寺の倭者七里撰田の兩人如く人の信と受け  
 浅井朝倉と利害所(所)と居と情とくけ浅井下守久政と  
 息使系守長政と又速と飲儀(儀)初倭を朝倉と通じてとも  
 と居を進めたりとも元来朝倉義系と跡きとあはれ急南  
 の倭議と一更せざりて一族武部を系系統とて申出てやつるに本  
 親寺の中系浅井又子と何とも至極の存理とせへく人  
 信長若三奴を(に)本親寺の勝利を以て其勢ひ強大はして出  
 出圍(軍勢とほ)向け(に)其附いふ防城とるとも打勝たる  
 是來(は)今浅井又子と謀と合せ大坂と控んで是と討は信長と云  
 さん(の)難言とありて國と外(と)後悔(し)給ふると流るるに義系漸

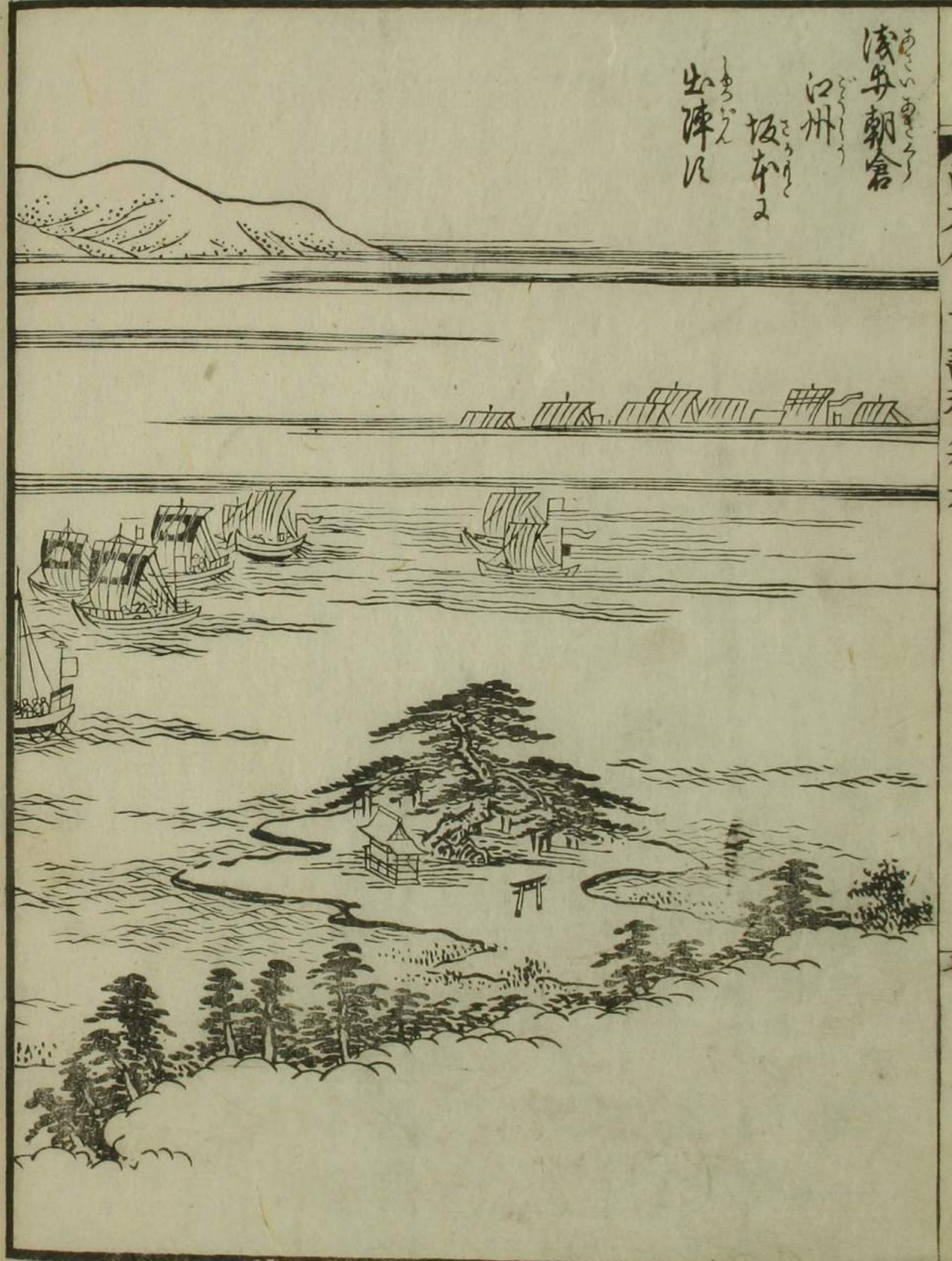
言又服一紙布の軍兵二万余騎を惜居城一系谷と出くは州  
一後向以深安又先と伊くふ小敷比毛もは及乃兵に又余人と集  
朝倉と勢とついに州坂本より陣しく東に石山のたよりを伊合せ  
たり扱もけり諸方又伊くかかれりるれ信長又小勢をきこ  
い安うぬるりてあうぬ苗圃表の巻も南もあき朝倉深安が軍う  
王城又煙とこげとせうは末代ともお軍家の振撥信長が恥辱か  
道いふはして苗圃とむらひ陣治して小圃勢と退退ん張るがう  
三奴が二堂本願寺の一撥治を去るがう安穩は引せはじいりる計  
略をかきて退くべきやと種く評議ありける亦人本下及右即秀  
右系弟のはまよは信長大き小敷比急ぎ対面して退陣の計と  
同治ふ秀の右邊で取り河後の通りけ退くこと大りし人某うけ孫う

と破り仕をきよは河津退陣い道三奴本願寺の城後多退来り  
とも粉のどくくはして秀の軍威と輝は道し只某が心よわりのい  
河合弟九郎信治の勢らせ孫ふは州より佐山の城之朝倉深安  
上治るさば先う佐山と妻は道しけ城敵の有とるがう河津圃の  
るど通り且東圃小圃の通路と塞る道し宜く大勢とせさ  
信治も力を添勢城と密固るしり孫へとも信長其言は云  
たぐひ森三丸湯門可成又三万余騎の遣兵と云(今佐山一院)  
ひ秀の右の河合と退き孫も退口のひ分を道し諸お又面送て  
謀と中合せ退陣の用意とるがう之け河本願寺は小圃(後せ  
七里三河守横回る膳立海り深安朝倉苗山は河合してたや  
は州坂本より出張のはしやたれば上人をばじりて下乃お舞とよ





日本書紀卷六



淡舟朝倉  
江州  
坂本  
出陣

日本書紀卷六

七

よろらび誠を勢と落せば信長の當地退去りわざありし間若と  
 へく敵乃勅靜をさせよとく物るれつる思ひと合せて顔いせけ  
 る小川後廿三日熱軍當地在陣拂「師承せらば陣中發劾大  
 方々」此と申しより中教寺中乃諸おいささささういふ大軍と配  
 追討「法敵の根と斷んと躍り上川く罵よぞ珍本を奉是と  
 制し一應の洋海大さ小遠つりけ種より度々の戦ひ味方勝利  
 を地うらうの毛滋の勝利より信長元來味方の勢と百勝一  
 揆と見あるより怒りよ際して謀計をも構へ只一息も表崩ん  
 と其機と計て奇計とわらひ處を以て突を討かぬ又信長按  
 外の級をささうけ度退口のまよふるより花の三好當地の強敵は後  
 浪舟朝倉の大軍せまより其中よ妙い軍と引く國へゆる信長

よろらびも使るくして退くべきや若信長をいうる者といはれ  
 ぞや又後守世よ「討まよ」足利家の信長なりし今川と云  
 一三好と退ひ仇く本に迫り浪舟朝倉地と編りお軍家再真の名を  
 捕と断「後より天下と併吾せんといは置る閑のおろしんや是と枝く  
 る屋の誰くぞや柴田多々同慶惠多瀧川仇く本下お計多明  
 智をばじつと一人當ふの軍お數十貞明の兵奉悉く軍より熱  
 一突を以て敵討せば味方の十人を以て敵の一人よ當りとも勝利  
 を得んやあひしより此かろくしく追討してりろき敵軍はたまひ  
 そと言と盡して止るなりお同後時の三好が一黨より中教寺へ後者  
 を以て中教寺の強い小川の朝倉浪舟大軍を敵「坂本と出張せしよ  
 しろ信長當地よたすより廿三日曉天熱軍と引拂ひ師國致との中



秀吉  
 退陣の  
 計議と  
 あり

南無妙法蓮華經  
 永通寶樂  
 永通寶樂

信長承りしひぬ三奴家（三奴家）に抄いしへ大軍と候し（大軍と候）に口の傍りと被て山崎  
 のわたりと追討し信長を討えん結構よりいへん本教寺の御勢に牧  
 方八幡の方へ軍勢と向らし力を合せ表打ちに信長たへ鬼神（鬼神）も  
 討りしはひはじけ強禦し合せん候をみてやけ申つまじうに信  
 吉と北門後の諸およりやいし軍師の信長と稱候終りて其  
 過り今三奴勢と合体し（合体）巡見り小田勢と討ん何の思はる  
 らんやけ討と多ひて後悔とも申候ははじと又打ちなれり  
 とまかり争奪其制とてうらうら知り再び止めぬと謀計を  
 構へて遣らうらん候をよじとて軍配をこそお知しるま川  
 繁津を祝去捨平治を咄くやけに信長退去乃石筋（石筋）の  
 南の岸依を牧方を退くは（退く）汝等八百余騎と引率し依を乃

本森（本森）の埋伏し小田の軍勢守とぐる附中軍へ鉄炮と打ちけ毎二毎三  
 の切崩せ毎騎れ母横田を膳西川勘解由僧衆は一万後寺如急  
 奔三ふ余騎を引て後面よりとてい外栗津去捨が伏兵殺らへ  
 急進んと狭と討治しと系内今女控七ふ余人を引をし  
 渡一口は埋伏し小田勢の休りれ丸と趣来るを候と發つて鉄炮と  
 うち打ちと長退せ候しと引を治しと候り既又空りしう路く  
 軍勢を引りけ聖廿二日の宵の間よりとていく又打ちたる

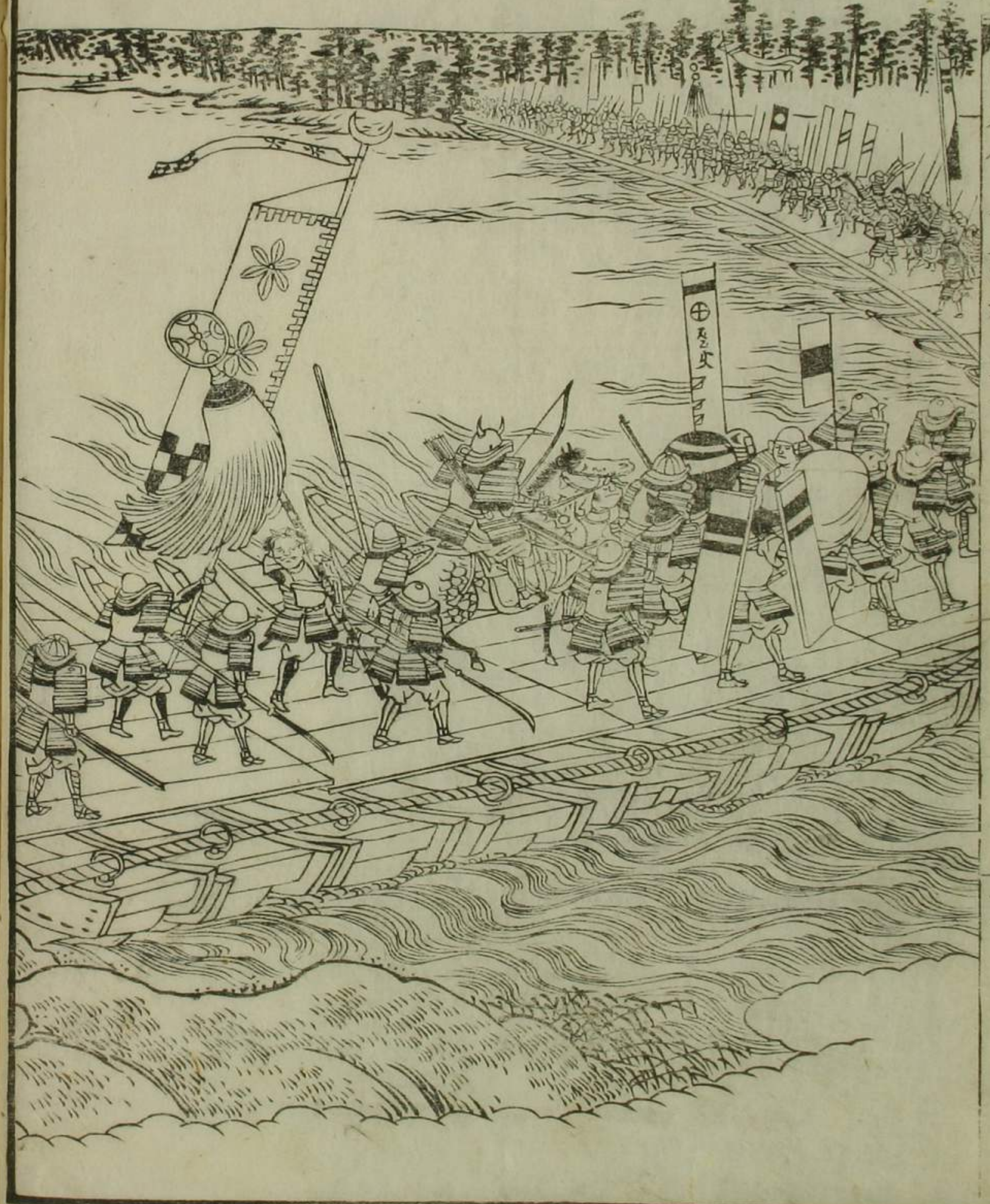
信長御撰州退陣之事

元龜元年九月廿二日の夜より本下辰吉郎秀吉諸方の合謀  
 く中候とてあくの謀計と構へ十分の休りと候し廿三日  
 曉天は退陣を催しちる先鋒は多久向右傍門射依り内森

画本信長記秋卷六



信長公記 長長柄川 弘安 橋と掛

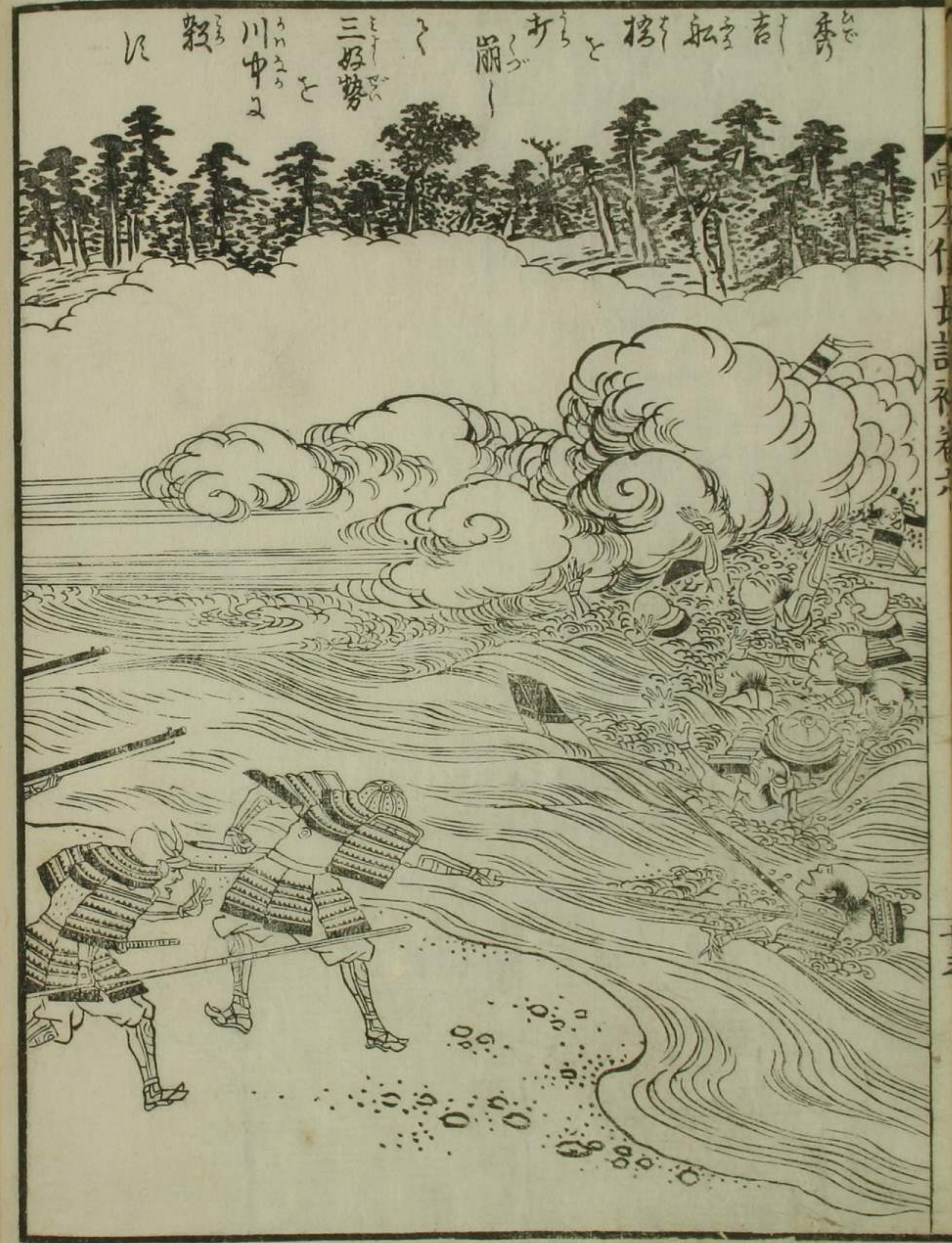


池田丹波守又余人中軍の信長御南委妙法蓮華經の大旗と  
 押立てせ紫田権六郎勝家藤原忠実の政虎勝門多丸塔九郎虎門  
 本下辰右郎明智十兵衛福原孝丸勝門林新三郎尾波河内守亦  
 二万余人後陣の檣州の佐人荒木權守丹兵衛政二万二  
 万余人都合其勢三万七万余人を余圍くの軍兵三万余人の悉く  
 晦陽の晦廿二日居城へ退散は是る中の兵糧と厭い本下  
 吉計いかり叔と熱軍隊伍ととの陣陣のけ附信長の本下  
 辰右郎と共に道平一万余人引合し密に軍中と出く長柄  
 川又船橋をうけさせお戻つて引合人熱軍の信長の御ま  
 侍より七字の大旗川月又懸し守口として押出ぬか  
 らに池田後陣の新城は勢より三好日向守日佐中守細川六郎

岩成を祝ひ又余人中軍の信長を討たんと馬と鹿して退り長柄  
 川よ来てこれ船橋をわけても小田勢の引合侍を三好勢  
 何の志慮も及びこそ後せやもせよと引合侍を何れ船橋  
 を押合りも合渡りも小田の岸に一村茂りたる本陣の内より  
 赤草の具足も固りたる武者一騎つりれ出大書よ鳴り  
 ろりいふ小三好の船兵も我言と怪しげし出附日本に抱いてる  
 功の若本下辰右郎秀吉と我の某が計略も入るる  
 来り命と送る何より以て備足せり核別の物せん冥  
 途の去来せよと云と見しが天地も崩れ響して彼船橋  
 を石火砲してお砕け船も人馬も粉もぬく後ぬ流ぬ流ける  
 け附陣の本陣の中より龍潭の馬下ることしとけ本下が良



秀吉 船 橋 と 崩 三好 勢 川 中 又 穀 川



朝野勝領... 志所くと退き... 喚志がり... 志所くと... 後殿荒本村... 中にも村... 勢ひ... 石山勢... 追来り... 伏せ... 退き... 伏せ... 退き...

軍へ鉄炮の... 勢ひ... 石山勢... 追来り... 伏せ... 退き... 伏せ... 退き... 追よせ...



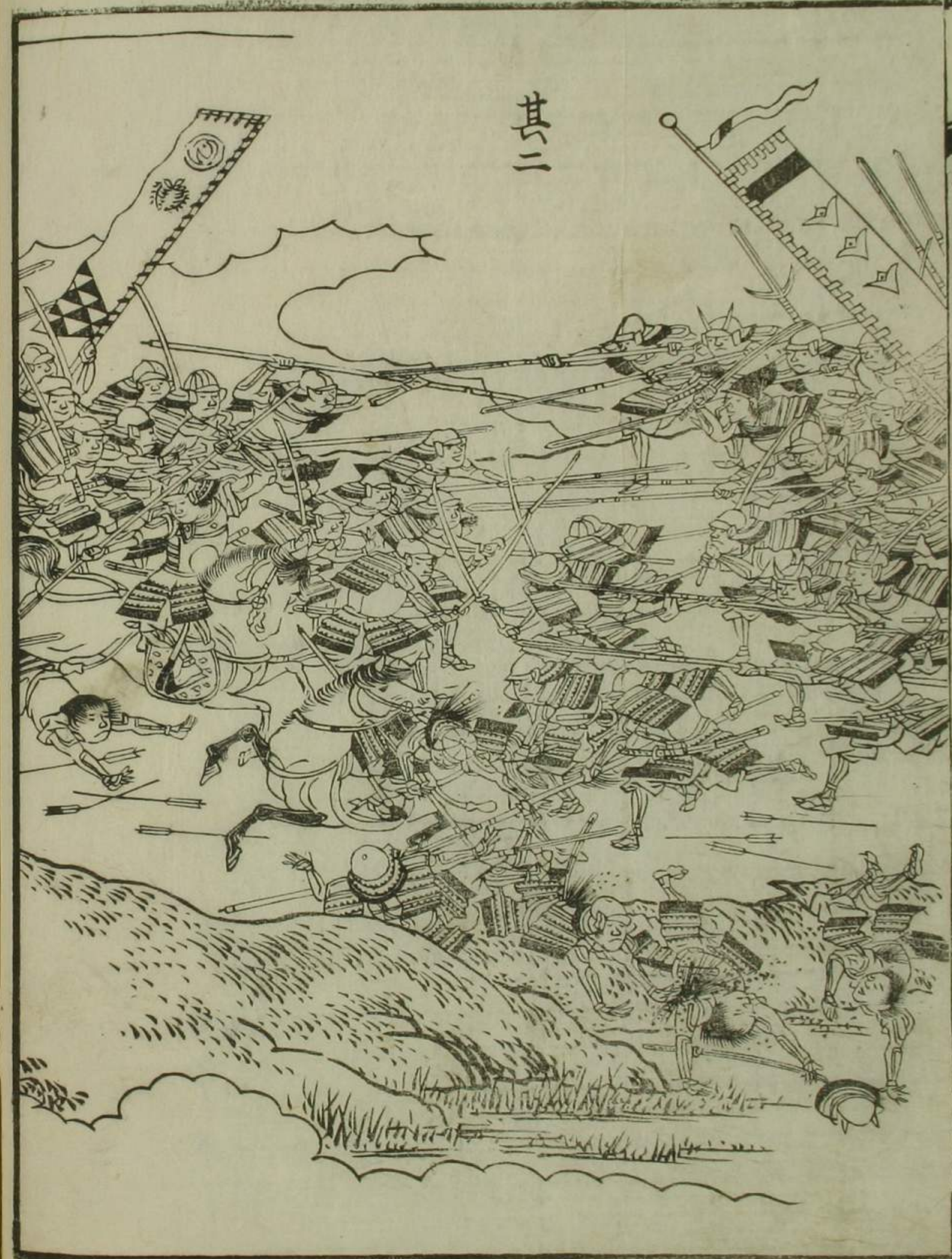


又逃去り柴田勝家味方より逃る者と追りて  
 渚軍とまどら殺十人の生捕を日通り引とせ自刀と接て  
 一人の首と切落せ其餘の生捕大に恐れ面を覆て去りて  
 皆日暮小南五阿弥陀佛く弥陀の名号唱えたり流石に本  
 守の門後なりとて殊勝けふとせたり勝家大の眼は角と  
 休養虫ゆく我言を怪しむけ先の洛筋に本教寺より伏兵  
 ぞし審は白伏せはかのさきと助けけ候よと云はしとあ  
 らざる者なりとす候と斬殺し是より或は本教寺へきては  
 かけるれ如坊主といとどり出細首宿に折落え返させ下  
 郎と罵る雷神のぞく雑兵と詮方なく上原信内今井権  
 七み余騎とて渡一口に埋伏せり其外伏勢ありこれなり

本末地獄と隠居する法もははり毛改毛改と中々小勝家  
 大に小お笑ひ士卒と命じ生捕ともが甲冑と脱せ味方の内は物  
 たりる兵は若せ智六字の名号去り相争ともえとせと  
 計兼と中合り渡一口に埋伏せり

石山勢殺軍之幸

去程に本教寺の軍お上原信内今井権七兩人一み余騎の兵士  
 と率に渡一口に埋伏し守は依るの合戦は味方殺せしは知  
 らぬ故に信長の殺軍と愛は喰らひ法敵を己さんと斥け  
 て待とせ候に彼柴田が仕立遣し候所の門後勢七八人息  
 を切て馳来り軍師を幸より両おの又候ては信長は洛へ  
 去軍勢に登りしは自らの小勢を引て西道へ入り柴田本



と煙く山崎より向明神の幕とてと落はく煙火を是より  
 追ひて追ひの面く上橋と後り橋舟水五瀬のわたりにて合戦  
 及びい各兩人より子く狐川を打後り山崎に埋伏し幕後をか  
 こめて戦ふとてとの御幸より急ぎ彼を向ひ移すと何いふじ  
 く若よりより上原今舟の兩人つりく其士衆と見ゆる小神原に  
 六字の石号と付石山よりの後者にお遠うけさば何りこい夏又  
 し知らばさうがけ石にまゝと蓋はしと焼くて信長と結んよく軍  
 勢と引率し據にめんく狐川へ強ひたりふ忽ち岡の夢に面より  
 後り男のりわりのに雲雨腹のどく小田の軍兵激き出八方と  
 困り門後勢大さふ勢のき南五三法敵の斗幕に漏ささう引よ  
 くと鳴る程と隠し死と石柱丸被逃げ勢と魁ヶ峯の煙頂より

大木大石成焼し落はく雨のどし門後勢敵百人首陣と牙と  
 いしがれ打奪りて死しうりる柴田摩惠多軍扇と板き討分  
 する家ぞうとくとお知るわど小田の大軍潮のどく追きて  
 斬伏羅伏敵よとぞいへ人死とさうり門後勢牙を道とん  
 とさまよひくい後川の激るあゝ追落され命と失く者其殺と  
 知らうり上原今舟の両おり今い是ととこい多難の苦中へ  
 押あひくけ入る方の目打の打る斗火花をちりして戦ひつら  
 其の命令にあらざれば兩人とも殺す所のも成負ひ終り乱軍  
 の中又討死をぞいしうりる小田勢の十多の勝利をた熱軍川  
 と後りて山崎より信長御先達てけ石と着陣あり互後互  
 勝軍の敵いとはい夏とて又幕後の体人を改めらと坂本として登



石山勢

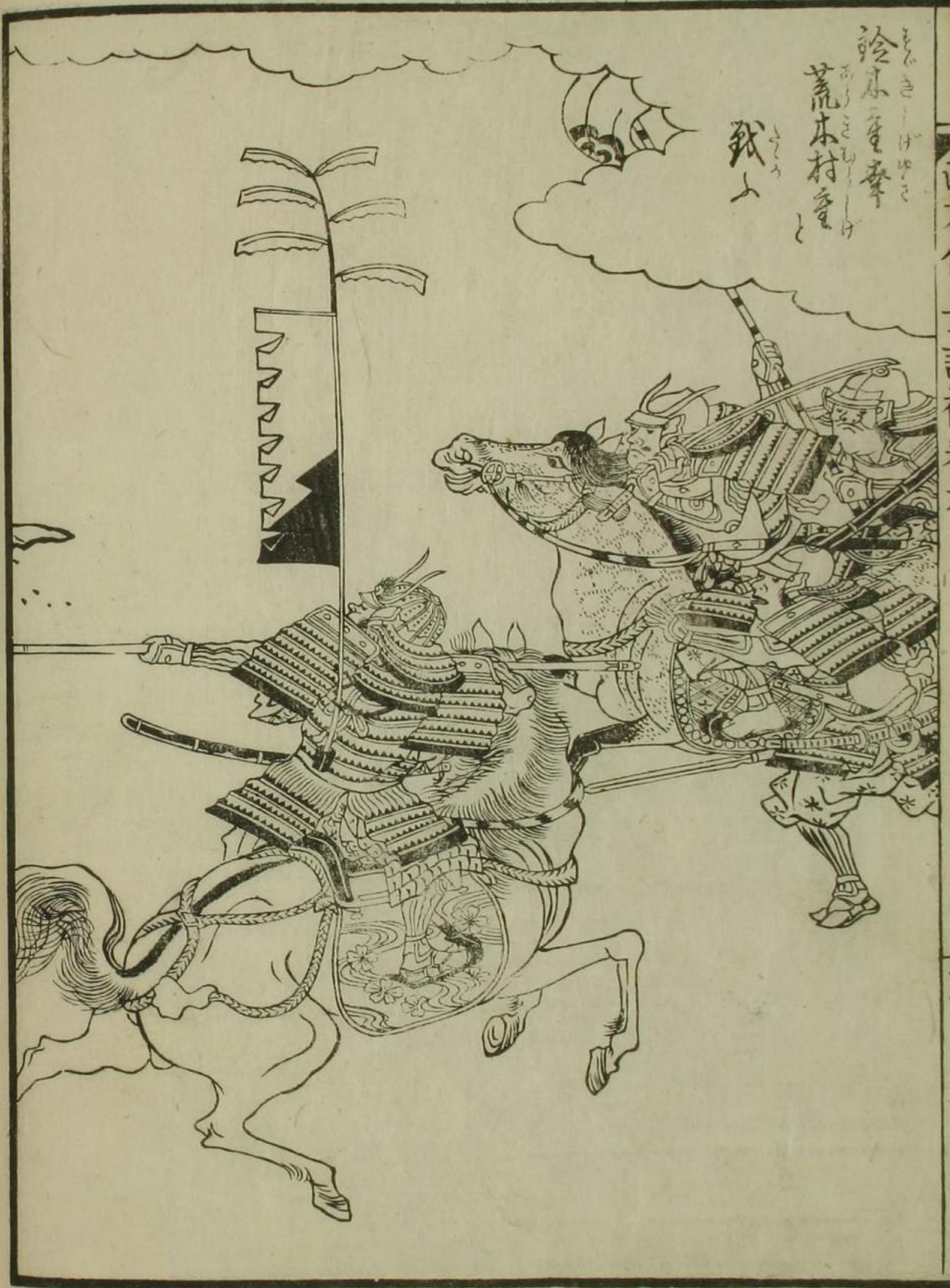
二



石山勢  
級軍

終ふそそりか秋寺の寺中へは軍師を率心よそまぬ今日の日  
 合戦追討の勝負いづれぞと交ふ心神安らふに立て見居て見接じ  
 くらげ絶つてやみ久し百余人の士率と引絶し十代の體印のむ  
 威の著よりしたるをえて扱うけ白星の瘰と着し其の跡は勝里  
 多貝柄の槍引さげ石山の構と証出外宿又里名の飼境よまらふ  
 又落武者追く馳来り味方乃故軍上原今并が討死のさまに  
 に云ととれいば率率勢勢とらるる一夢都て是我流り之係り  
 小田家の臣下は抄いし誰うかくれど其軍配をぬけや深して後  
 の小冠者本下原右郎が計策るるに追うけ討崩えんと一報たて  
 証出れとを率一族又川流浪之ぬとらる者響つてととらり止く  
 中々の軍師にじりけ軍と追り勿きととらり終いに取らばや

然るを五謀乃お率為討定とととら追討して故とえり茶車の  
 覆るをりて後軍のいほしとぬれ流あり今却て軍師自追  
 討せんと終ふいづるるをや率率とらる不測是兵家の虚  
 くさるる方り率率は味方又追んど心つり款は追はまじとら  
 心つりけぬに追討とらるとも利あるは今既し軍敵に款は味方  
 追討追討の心はしけ不意にぬき追討し又勝どとらりつら  
 ぶらつ然れつてけとと捨く証出せば川流も其理は順し日勢又  
 百餘騎砂烟をよと追うけつり其日の申の懸計と傍のけ方を  
 荒本横津守村をう引外勢は追付く一言の回答も及ばぬと  
 嘆いゝ安まとはとらひけらと荒本が二軍我我りんとつらもの  
 終るきとまた討る者忽七十余人に方へれと故また荒本村を



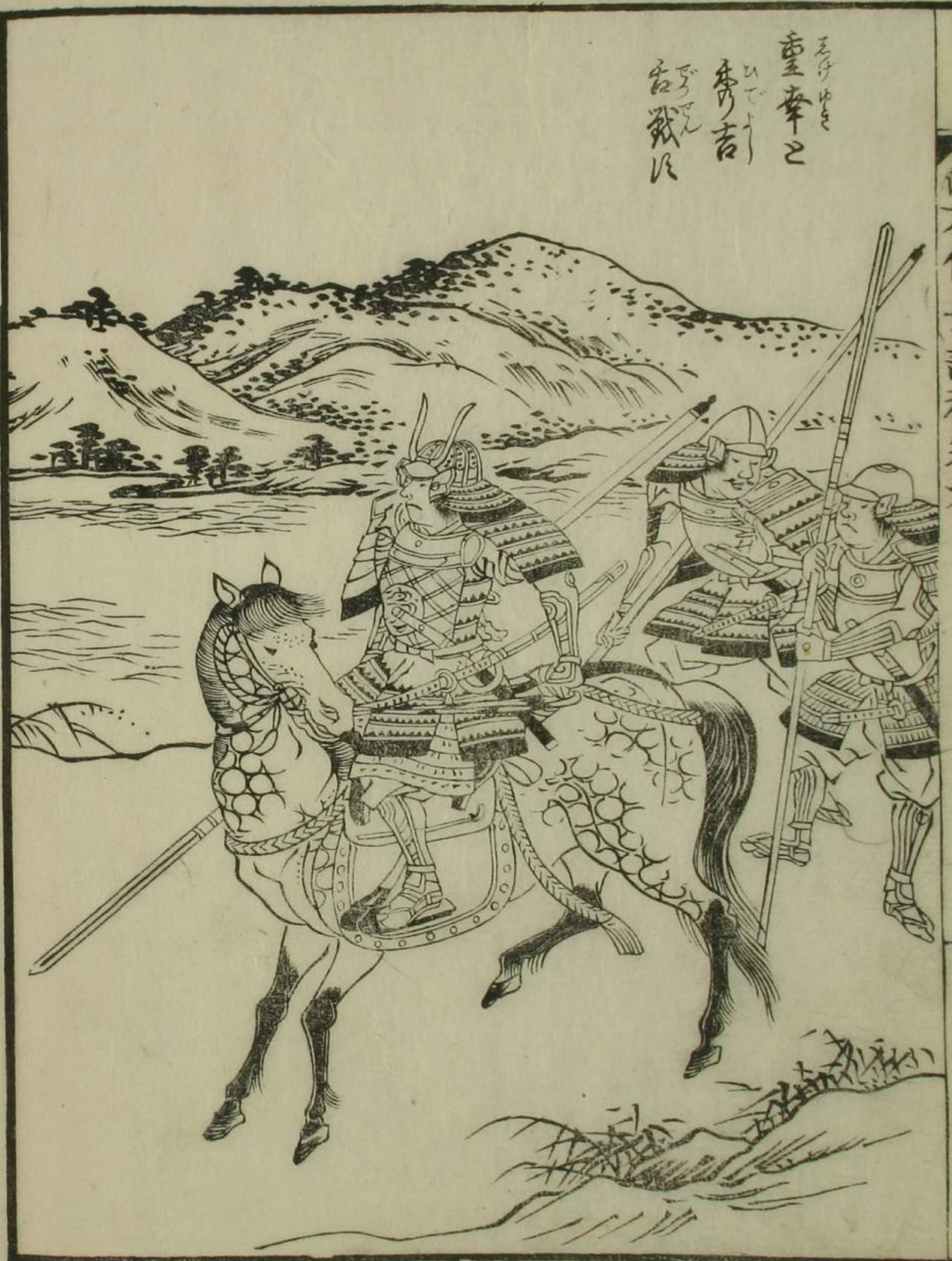
鈴木重幸  
荒木村重  
我人

西本信長言禮卷六

此ありさまを凡そく大さな怒り何者うれば我軍中と聞し不れと  
 如くや一槍は突殺さんと逃る味方と目よしかけに陣前馬と  
 系し一撥系の大おの何奴なりぞ名のうたふりあふうに各系て  
 出よと叫われし幸も陣取馬と強出た荒本摂州殿と見  
 しい倅同うかく中某の紀州後白の信人鈴木源左衛門尉を幸り  
 いど見系し罵て槍をい袖門て突来る村を扱ひせゆり中取ちの  
 軍師鈴木重幸とらんれ突とめてる名に信人とのと向と  
 んと槍と合せ龍のどく陣と虎のどく陣と秘術と盡しす耐斗り  
 戦ひつらが双方ゆり勇武乃英傑激し申しき武士とて両軍皆  
 く鳴りとま門め息とつらく見物に荒本元来大カ軍の若うれば  
 唯一槍と心いしよ幸も勇武少しまたゆまに傑出に槍先と拂ひ

換し村をが鹿の吹返しをまうう小突通され驚くまうと馬か  
 とふと落うりたる幸得たりと槍を座し下げ突と突不と荒本  
 が良名も六十人強集り自と解ふと引退く大ぬうれどくれば後  
 兵いづころかき風の木の系をとりはどくは方へ門と迎敵さう  
 系を幸れとまうどく乱さうと逃る敵と追とぐふと山傍の町に到  
 向ふをき門と見ゆりうう小敵強推しつる武者三ふ余り凛然と極  
 を立合の亂草の馬印と陣前推立させ本下後吉郎秀吉殿に  
 又わたり系を幸が来るが見ゆると白眼それへ来る若う鈴木源  
 左衛門尉を幸りつばや汝天道又逞い人を又殺し信後の如くは  
 き合戦をとめく治を妨げ死と好む悪逆不道天地神明共  
 你と誅伐せんとい今日秀吉が謀中又落く帰るべき治に速うみ





日本有長言

九

誅とぶれし信長御汝が徳と押し惜く家し降城せし若衆  
 を悔し降参し罪を謝せよ餘等も隙にして軍補佐の信  
 長卿と通討しもうんとは命知れぬの曲者なり今日の後殿の本  
 下及右郎秀右が中終りたるぞよく取門と真途との去聲よ  
 せよと大勇小略りれが事幸々我より馬と立てつらく秀右が  
 容貌とあるふ長きうは面の後乃じと人も威風凛々と侍  
 を拂ひ眼先人を射放て面と射し見るも徳つた夢大はして云語  
 さいやるり濃又天姓の人傑け死せと膝むべきい必け人なりじと  
 心中又沸く感し軍ととり退んとせしが二三日の言はらうさ引  
 去ん味方英気を失ふありと夢を揚て大き小笑ひ麻と退  
 若いふを死にばと汝人の悪と責る我知れず自悪と改ることと

知れ信長の英雄又仕へる軍と掟て己が眼とと轂ひ終り天や  
 と併吞せんと死見よや此うは志すお軍と失ひ一度威勢と震  
 とつふも力を己に家名し又漸滅せん汝うは汝邪の信長を  
 掛け傷死殺し事舎と終り山豈是を吾人の不業と況や弱と掛け  
 強と凌ぐ大英雄の心は汝等が知れぬにけり汝と言を放て罵らう  
 秀右返言しうく立とり悪人又射し論は互益と吾が智の馬引  
 よせてゆくまとおしありきて戦場は対面せんと見向し中うは優  
 とと方としてのがりたる

繪本拾遺信長記初篇卷三六終



